

現代ウルドゥー文学の一潮流

——‘Alāmatī Afsāna, Tajrīdī Afsāna——

萩 田 博

小論では1960年代にウルドゥー小説の分野で一つの大きな潮流を形成していった‘Alāmatī Afsāna（象徴小説）、Tajrīdī Afsāna（抽象小説）について取り上げ、その特質及びウルドゥー文学史上に於ける位置付けについて考察してみたいと思う。

さて、まずこの‘Alāmatī Afsāna, Tajrīdī Afsāna という用語であるが、これは研究者や文芸評論家によって様々な概念規定がなされている現状にあるが、1940年代中頃より頭在化した進歩主義文学運動指導部（例えばサッジャード・ザヒールやアリー・サルダール・ジャアフリーなど）の有していた文学理念と比較することによってより明確になると思われる。

1940年代中葉より、進歩主義文学運動は、文学が社会変革のための手段であり、人間存在を規定する政治的、社会的、経済的諸問題が作品の主題として取り上げられねばならないとし、手法的には作者の意図することを読者に明確に伝達するために、直截な表現を用いた写実主義が採用されるべきであるとする理念に支配されるようになった。これに対して‘Alāmatī Afsāna, Tajrīdī Afsāna と呼ばれる小説では政治的、経済的、社会的状況よりも個の心的過程や個を取り巻く文化的背景が主題として取り上げられる傾向にあり、手法的には、神話、Dāstān, 様々の宗教聖典から象徴的なものを抽出し、小説に繰り返す作業や、時代・場所の設定をせず、登場人物の名や性格描写を省略し、プロットを無視するといったアンチ・ストーリー的なものも存在している。こうした範疇に入る作品の系譜を考える場合に注意しておかねばならないのは、こうした小説が1960年代前後に突如出現したわけではないことである。例えば1932年に出版された『Angāre』に収録されている諸作品には‘Alāmatī Afsāna, Tajrīdī Afsāna の篇疇に入る短編小説であるし、この作品集の共同執筆者の一人である、アフマド・アリーの短編集『Qaid khāna』(1944年刊)に収められている「Qaid khāna」, 「Prem kahānī」, 「Qal’a」, 「Guzre dinōṇ ki yād」は思想的にも優れた内容を持つ‘Alāmatī Afsāna, Tajrīdī Afsāna である。またラージェンダル・スィング・ベーディーの

後期の短編にはこうした傾向を持つものが多くなっていったことにも注意しておきたい。

さて、小論では1960年代前後から ‘Alāmatī Afsāna, Tajridī Afsāna の執筆を開始し、現在に至るまで意欲的な創作活動を持続し、この分野の作家として最も重要な存在であるとインティザール・フサイン Intizār Husain を中心に取り上げて、こうした短編小説の成立過程と文学史的背景を考察することにする。

インディザール・フサインは1925年12月に Bulandshahr 県にある Dubāi に生まれ、10歳前後までの期間をこの地で過ごすことになった。篤信家である父の方針で彼はまずアラビア語の教育をうけることになったが、幼ない彼の関心は自らを取り巻く自然やそれにまつわる民間伝承、祖母が毎晩のように話してくれる物語、父の所蔵していた千夜一夜物語などに向かっていた。インティザール・フサインは、しばしば〈過去〉や〈記憶〉を描出する作家であると評されるが、その〈過去〉、〈記憶〉の元型は、この Dubāi 時代に培われたものであり、彼の文学的営為を探る上で非常に重要な意味を持っている。Dubāi から Hapur に移り、High School を卒業した彼は Mērāṭh College に入学し、1946年にウルドゥーで M. A. の学位を取得した。メーラト時代に於いて特筆すべきことはムハンマド・ハサン・アスカリーとの出会いであろう。両者の交友はイン・バ分離独立後、より緊密なものとなってゆく。分離独立後彼はラーホールに移住し、『Adab-e Latif』等の文芸雑誌や様々な新聞の編集などに携って現在に至っている。現在までに刊行された彼の主要著書は以下の通りである。

『Galī kūce』(短編集) 1952年刊、『Cānd gahan』(長編小説) 1953年刊、『Kankari』(短編集) 1955年刊、『Din aur dāstān』(中編小説集) 1962年刊、『Ākhiri ādmi』(短編集) 1967年刊、『Zarre』(コラム集) 1976年刊、『Basti』(長編小説) 1979年刊、『Kachwe』(短編集) 1981年刊、『‘Alāmatōṇ ka zawāl』(評論集) 1983年刊、『Zamin aur falak aur』(旅行記) 1984年刊。

さて次に進歩主義文学運動に対して、彼のとった位相について述べることにする。文学に傾倒する学生時代を過ごしていた頃、彼の心を捉えたのは、1910年代生まれの作家達であり、特にクリシャン・チャンダル作品は彼を大いに魅了した。またプレームチャンドは彼の最も敬愛する作家の一人であった。このことから容易に推察できるように、学生時代のインティザール・フサインは進歩主義文学運動に共鳴し、その影響を受容していったのである。彼が進歩主義文学運動に疑念を持ちはじめた大きな要因となったのはイン・バ分離独立であった。分離

独立前後の未曾有の混乱期を背景として、いわゆる「動乱文学」が執筆されていたが、この分離独立をムスリムの封建的地主とイギリスの陰謀であるといった捉え方をした作品や「動乱」を人間性を喪失した人々による悪と規定し、ヒューマニスティックな感情を唱い上げた作品はインティザール・フサインにとって受容することの出来ないものであった。彼にとってこの「動乱」は複合的で螺旋状の構造を持った歴史的背景を考察することを強いるものであった。また彼にとってはこの「動乱」そのものより、Hijrat (移住) というものがかり大きな時代的経験として映った。インド側からパーキスターンに移住した者だけではなく、パーキスターン領に分離独立以前からいた者も新生国家に組み込まれたことによって精神的 Hijrat を経験したのであり、その意味を考えることが作家の責務であると彼は考えた。そしてこの Hijrat によって彼が直面したのは、失なわれた社会とは何であったかという疑問であった。こうして自らのアイデンティティーを模索する作業に入った彼にとって進歩主義文学者は「現在」と「未来」を重視するあまり、「過去」に関心を払っていないと映ったのである。そして彼の考える「過去」とは歴史、宗教、神話、物語文学、信仰、俗信等、様々なものを包含した一つの文化的複合体であった。こうした彼の問題意識には、ウルドゥー文芸批評の作業過程でインド・ムスリムのアイデンティティーを模索する課題を追求していったムハンマド・ハサン・アスカリーと同質のものを読み取ることが出来る。また彼の考える「過去」を構成するものには象徴性をおびたものが多いことは、後の彼の文学的営為を考察する上で非常に重要な意味を持っているのである。

さて次に彼の作品について述べることにする。彼が作家活動を開始したのはパーキスターンに移住後のことであった。彼の処女作である「Qaiyūmā ki dukān」は1948年に『Adab-e Latīf』誌に発表されている。『Galī kūce』、『Cānd gahan』、『Kankari』には1950年代中頃までに彼の執筆した小説が収められているが、この時代の作品の特徴として、分離独立以前の小さな町に住む人々の生活を愛惜を込め、写実的な手法で丹念に描出していることや、土地や文化的・社会的紐帯を断ちパーキスターンへの移住を選択した人々が移住後直面しなければならなかった様々の問題が取り上げられていることなどがあげられよう。こうした彼の写実主義的作風が変化を見せるのは1950年代後半に入ってからのものであり、1961年『Nuqūsh』に発表された「Ākhiri admī」は‘Alāmatī Afsāna, Tajridī Afsāna」として完成度の高い彼の代表作の一つである。自分以外の町の住民が皆猿になってしまった男が、自分も猿になるのではないかという恐怖と闘いながら人間とし

て生きてゆこうとする姿を描き、終にはその男も猿になってしまうという結末を迎えるこの作品は、安息日に魚を食べた罰として猿にされたユダヤ人がいたという、コーランに記されている伝承が下敷きになっている。そしてこの短編でインティザール・フサインは現代人の〈孤立〉、道徳的退廃を象徴的に提示しようとしたと考えられるのである。1962年『Savērā』誌に発表された「Zard kuttā」ではイスラーム神秘主義者の言行録を基底に据え、人間の〈欲望〉の問題が扱われている。

こうしてコーランやハディース、Dāstān, ジャータカ等様々な書物に記されている事柄から着想を得て、それを小説の中で再構成し、現代人の抱える心理的、文化的諸問題を象徴的に提示するという手法をインティザール・フサインはこの時代に確立していったのである。また彼は小説で政治状況を反映したものを全く執筆しなかった訳ではなく、例えば『Shahr-e Afsos』に収録されている短編小説には、1971年のバングラデシュ独立前後の状況を暗示的に描出したものが数編あることに注目しておきたい。

インティザール・フサインが‘Alāmatī Afsāna, Tajrīdī Afsāna を執筆しはじめたのと、ほぼ時期を同じくして、アンワル・サジャード（1935～）、ハーリダ・フサイン（1938～）、ラシード・アムジャド、スレーンダル・ブラカーシュ（1930～）、バルラージ・メーンラー（1935～）らの作家が‘Alāmatī Afsāna, Tajrīdī Afsāna の執筆を開始している。彼らとインティザール・フサインの手法には幾らかの相違点がある。例えばインティザール・フサインが宗教聖典、古代説話、Dāstān 等から読者に了解可能な〈喩〉を描出し、小説に適用した作品を多く執筆しているのに対し、他の作家はより抽象的かつ個人的な〈喩〉を用いた作品を創出している。またインティザール・フサインの小説がプロットや〈物語性〉を保持しているのに対し、ラシード・アムジャドのようにそうしたプロットや〈物語性〉をも取って捨象することを辞さない文学姿勢を取る者も少なくないのである。インティザール・フサインは「Afsāne meṇ cauthā khūṇṭ」と題する評論の中で1930年代から40年代にかけて確立されていったウルドゥー小説の手法を「19世紀の文学手法」として捉え、自らをも含めて‘Alāmatī Afsāna, Tajrīdī Afsāna を執筆する作家は「20世紀の文学手法」を模索しているのだと論じている。

進歩主義文学運動は1930年代後半から40年代中葉まで当時の政治状況とも相俟ってウルドゥー文学者に大きな影響を及ぼし、優れた作品が数多く生み出されて

いった。しかしサッジャード・ザヒール、アリー・サルダール・ジャアフリーらは進歩主義文学というものの理念を社会主義リアリズムの方向へ収斂させようとしていった。こうした動向は分離独立以降にウルドゥー小説の執筆を開始した作家にとっては主題と手法の硬直化、自らの問題意識を十分に表出しきれないものとして映ったと考えられる。‘Alāmatī Afsāna, Tajrīdī Afsāna が1960年代に入って多くの作家によって創作されるようになった背景には、新進作家の進歩主義文学運動の持つ文学理念に対する疑念、反撥と共にパーキスターンに於ける進歩主義文学運動に対する弾圧、アイユブ政権によって一層強化された言論統制も大きく作用していると考えられる。

現在 ‘Alāmatī Afsāna, Tajrīdī Afsāna はウルドゥー小説の分野に於いて非常に大きな位置を占めており、インティザール・フサインやアンワル・サッジャード以降の世代の作家の多くがこうした小説を執筆している。こうした傾向に危惧を抱いている文学者、評論家も少なからず、特に〈了解性〉をも無視したアンチ・ストーリーを志向する一部の作家の文学的営為に対しては批判的な意見が多い。現在ウルドゥー小説が停滞状況にあると言われる原因を ‘Alāmatī Afsāna, Tajrīdī Afsāna の持つ〈抽象性〉に求める Dr. ジャミール・ジャーレビーらによる批判は今後十分に検討されねばならない重要性を有していると考えられる。インティザール・フサイン自身も「Afsāne meṇ cauthā khūṭ」で自らを含めた ‘Alāmatī Afsāna, Tajrīdī Afsāna の作家の文学的営為を「意味を持った新しい小説」が創作されるための下地を準備する過程とし捉えているのである。

〈キーワード Alāmatī Afsāna, Tajrīdī Afsāna, インテザール・フサイン

(東京外国語大学講師)